

## 第五章

# 神を求め人びととの語り

—— ケーシャブ・センとの交流 ——

「蓮の花が咲くと、蜂は自ら蜜を求めてやってくる。

磁石が鉄に向かつて、自分のそばに來いと言うだろうか？ そんな必要はない。磁力に引かれて鉄は突進してくるのだ。

ランプに灯がともされると、蛾は群をなしてやってくる。別に招かれているわけではない——。それと同じように、神の命令をうけている説教者は、聴きに來てくれと人びとを招く必要はない。講演の日時を広告したり、看板を立てたりする必要もない。抵抗し難い引力にひかれて、真理を求める人びとは自然に集まってくる」

これはラーマクリシュナが好んで弟子たちに語った言葉であつたが、このことは彼自身の生涯について最もよく実証された。やがて、あらゆる宗旨、あらゆる信仰を待った人びとが彼の許もとに蝟集いしゅうして教えを乞うようになったのである。その中には序章に紹介した新興宗教活動の指導者たちも入つていた。

ラーマクリシュナは自らもよく語つたが、また秀れた学者や宗教家に会つて彼らの説を傾聴するのが実に好きであつた。カーリー寺院に來た人たちから評判をきくと、進んで会いに行つた。



ダヤーナンド・サラスワティ

顔を合わせただけで、彼は相手の品性と心の状態を正確に見透す。興がのれば話の途中で歌をうたい出し、また三昧に入ってしまうこともある。前三昧境（三昧に入る一歩手前の意識状態）になると、「学者も博士もワラ屑くずみたいに見える」から、相手の名声や社会的地位などにかまわず朗らかな大声をあげて笑いとばす。時には、後になってユーモアにあふれたしかも手きびしい批評を下すこともあった。

一八七二年の末、彼は友人の一人のある学者に伴われてカルカッタへ行き、一八七三年の始めまでそこに滞在していたが、その際、ダヤーナンド・サラスワティに会っている。この偉大なヴェーダ学者は、それから間もない一八七五年四月に、ボンベイに於てアーリヤ協会サマージの旗を挙げるのであるが、当時は瞑想生活から出て、イスラム教とキリスト教の挑戦を受けて立ち、ヴェーダに基づく純粋なヒンドゥー教を奉じてインドに侵入したあらゆる外国思想と戦うべく、まさに活動を開始したところであった。

彼はラーマクリシュナより十二歳年長である。ラーマクリシュナが彼に対してどのような感想

を持ったか、想像に難くない。自分の考えを唯一無上の真理として他に強制し、他人の思想を容認しない心的態度は、ラーマクリシユナが最も嫌ったところである。しかし、ダヤーナンダは話し中に三昧に入ったラーマクリシユナの姿を見て、心の底から自分自身をなげいてこう言ったという――。

「われわれは、ヴェーダやヴェーダーンタを研究しつくしたが、しかしその成果はむしろこの大聖者の方にみられる。このかたを見て、学者たちはただ経典や哲学書をかきまぜてバターミルクを飲むだけ（敗北、挫折の意）であり、このような大聖者たちがバターを食べるのだ（成功の意）ということがはつきりわかった」

その当時、カルカッタは西欧思想の洪水にみまわれていた。さまざまな人に会って話をきくにつけ、ラーマクリシユナの興味を最もそつたのは、キリスト教という宗教のことであつた。マトールの死後すぐに、カルカッタの富豪でサンブー・マリツクという紳士が彼をお師匠様と呼んで、諸費用一切をひきうけて仕えていたが、この人が彼のために聖書を読んできかせてくれるようになった。ラーマクリシユナは熱心に聴いて、貪るようにキリストに聞かすすべてのことを吸収し、イエスの純真な生涯とその福音に魅せられてしまったのである。そして、この新しい宗教を通じて神にまみえたいという希望をもつようになった。



ジャドウ・マリックの別荘にある  
聖母マリアが幼児キリストを抱く絵

それから間もなく、寺の近くにあるジャドウ・マリックという一信者の別荘に行き、客間に坐っていた。壁には幾枚もの美しい絵がかけてあり、その中に聖母マリアが幼児キリストを抱いている絵がある。ラーマクリシユナの目はそこへ釘付けとなった。じっと見つめながらキリストの生涯を想っていると、その絵の中の聖なる母子は生命が通っているように活々となり、<sup>きらげん</sup>燦然と光を放って彼の全身を包んだ。そのときから彼の心はヒンドウの神々から引き離され、どうしようもない力でキリストの方に惹きつけられてゆく。新しい想念が、いままでのヒンドウ的思想をぐんぐんと心の片隅に追いやってしまふ。あまりのことに彼は「大実母」に救いを

求めた——「マー！これはいつたい、どういうこと？ いったい、わたしに何をしようというつもりなんですか？」——しかし、無駄であった。それから三日間、彼の心はキリストとその理想に満たされ、彼の全身全霊はキリストの愛に浸りきっていた。もちろんカーリー堂に詣でることもしない。こんなことは寺へ来てはじめてである。四日目の午後、<sup>パンチャバタイ</sup>五聖樹の杜を歩いていると、澄み切った表情をした異様な姿の人物が

彼をじつと見つめながら近づいてきた。彼は一目でその人が外国人であることを知った。その姿がまぢかに近づいたとき、彼の心の奥底から声がかきこえた——「これが人類の贖罪のため自らの血を流して苦悩したキリストだ！これは愛の化身である大ヨーガ行者、イエス以外の何ものでもない！」

すると、人の子イエスは大実母の子ラーマクリシュナをその胸にしかと抱きしめ、二人は合体した。キリストはラーマクリシュナの中に入り、瞬間、彼は三昧に入り、すべての外界の意識を失った。この経験以来、彼はイエス・キリストが神の化身であることを信じて疑わなかった。八年前にイスラム教体験をし、今またキリスト教を身をもって経験したラーマクリシュナは、結局すべての宗教は同様に真実であり、同じ目的をもち、同じことを教えようと努めている、それらの差異は、そこに達する方法と、民族の文化や人の知能程度による表現のちがいでだけである、という確信をますます強めたのである。

当時、ブラーフマ協会の指導者、ケーシャブ・チャンドラ・センの名声は天下に鳴りひびいていた。

彼はバラモンの一階級である医師のカーストに生まれ、家は富裕だったが早くから孤児となり、英国流の教育をうけている。創立者ラム・モハン・ロイの後をうけてブラーフマ協会を



ケーシャブ・チャンドラ・セン（中央）と弟子たち

指導していた大貴族、デベンドラナート・タゴール（詩聖タゴールの父）に寵愛されて、二十四歳の若さで師の補佐役となった。生まれながらにして人々の精神的指導者となるべき素質を持っていた彼は、たちまち師タゴールを凌駕し、ベンガルの知識階級のなかに圧倒的な人望を得るようになる。

キリスト教に深く傾倒してヒンドゥー教の形式主義を嫌い、インドの指導者には珍しくサンスクリットを知らなかった。やがて、キリスト教をブラーフマ協会に導入しようとして師と決定的に対立し、遂に袂を分かつたが、その学識と雄弁は一世を風靡して、インテリ青年の崇拜の的であった。また彼はその活動を通じて幾多の社会教育機関を民衆のために創設している。一八七〇年に英国へ行ったときは、その完璧な英語と音楽的な声と、熱情あふれる雄弁によって、数万の英国人

を魅了したと言う。ピクトリヤ女王も丁重に彼を招待して食事とともにしたほどであった。

前述のサンブー・マリックもブラーフマ協会の会員でもあり、そのほかにもカルカッタに行けばケーシャブの名を耳にしない日は一日もないといつてよい。ラーマクリシュナは是非この人に会ってみたいと思っていた。

一八七五年三月、ケーシャブはカーリー寺院から二、三哩マイルほど離れたベルガリヤという土地にある別荘に滞在していた。数人の高弟とともに瞑想と祈禱に日を送っていたのである。ある日の午後、ラーマクリシュナは甥のフリダイを伴につれて、馬車に乗ってその別荘を訪ねた。この馬車は彼の熱心な信者になっていたビシユワナート大佐（ネバールの王室代理人）のものである。

ケーシャブは門人たちと池の傍に坐っていた。フリダイが馬車から降りて彼に近づき、私の母方の叔父があなた様から神の話を書きたいと言うので連れてきた、ぜひ会っていただきたいと申し出る。この有名な人物が軽くうなずくのを見て、フリダイは叔父を馬車から降ろし、案内してきた。見栄みばえのない瘦せた男が来ても、紳士たちはさして注意もはらわなかった。しかし、その田舎男が口をききはじると、ケーシャブの脊髄に電流がながれた。彼は金しぼりにあったように身動きもせず、誰の紹介もなくやってきたその人の口もとを凝視していた——。ラーマクリシュナは、例によって歌をうたった。医師階級カーストから出た見神の詩人、ラームブラサードの

傑作を……。

カーリーの性さがと相すがたを知るは誰ぞ

六派の哲学 はるかに及ばず

……

歌の途中で三昧に入った。ケーシャブたちは、三昧ということについて書物で読んだり、話で聞いたりしたことはあるが、実際に見るのは生まれて初めてである。彼らは声もなく、その神聖な姿に見入っていた。やがて、フリダイが叔父の耳もとでオームをくりかえす。するとラーマクリシュナの意識はゆるやかに降りてきて、うつとりと半眼をひらき、そしてまた、言葉が、甘露の雨となって彼らの上にも降りそそぐ……。

この日、ケーシャブは、サナータタダルマの体現者に出会った。ラーマクリシュナは、ともに語るに足る人物を見出した。名声、学識、富裕な家庭、ともすれば享乐的に傾く性向、およそ真理かみを悟るためには重荷にこそなれ、何の役にも立たぬものをあまりにも多く持ったケーシャブの内面うちに、稀うにみる宗教的素質と、求神の熱誠とをラーマクリシュナは見ぬいたのである。この日から幽明界ゆうめいさいを異ことにするまで、両巨匠の美しい交際は絶えることなく続いた。ケーシャブがラーマクリシュナに捧げた無私むじの愛情は、人間精神の精美の極みと言うべきであろう。

二人が会見した数日後、カルカッタの新聞に次のようなケーシャブの記事が載った。

「数日前、私は南<sup>ドゥンキーンシヨル</sup>神村の大覚者ラーマクリシュナと、ベルガリヤの別荘に於て会見した。その人格の奥行き之の深さ、洞察力、そして子供のように無邪気な態度に、われわれは完全に魅了されたのである。静かな落ち着きのうちに、えも言われぬ優<sup>やさ</sup>しさと朗らかさをたたえ、よく観察すると、絶えまなくヨーガの状態にあられるようであった。

いま、われわれが感じていることは次の如くである。——ヒンドゥー教の底知れぬ深い領域を探究するならば、如何ばかりの美と真理と善とを発見できることであろうか、と。そうでなければ、この大覚者の如く、神そのものを彷彿とさせる偉大なヨーギが現れるはずがない」(一八七五年三月二十八日、日曜日。「ミラー」紙より)

ケーシャブは、ラーマクリシュナについて自分の友人たちに語り、かつその教えについて簡単な記述と、二、三の教訓を発表したが、これで既に十分であった。カルカッタの教養ある男子、上流家庭の婦人たちは、挙<sup>こぞ</sup>つてラーマクリシュナの許<sup>もと</sup>に教えを乞うた。

ケーシャブは一人で、または門人たちを連れて時どきラーマクリシュナを訪れた。この稀代の雄弁家は、ラーマクリシュナの前にくるとほとんど口をきかず、ラーマクリシュナの一言一句も



ナバビダーン (新摂理協会)



ケーシャブ・チャンドラ・セン

聞き逃すまいと全身を耳にして聴いているばかりであった。そして大覺者が三昧に入ると、彼は自らも清められんがために、うやうやしくその足にふれておしいただくのであった。時たま短い質問を發して説明を乞うだけのケーシャブに対して、ラーマクリシュナはよくねだったものである――。

「ケーシャブさん、<sup>バブ</sup>あんたの講演はすばらしいと皆がほめているよ。ひとつ、わたしにも聴かせておくれ」

だが、ケーシャブは決して承知しなかった。――「金物屋の店へきて、自分の持つている細針一本を出して見せびらかす気にはなれません」

ケーシャブはまた、時どきカルカッタの自邸にラーマクリシュナを招待したり、ブラーフマ

協会の年次祭やその他の集まりなどにも招いたが、そのたび、ラーマクリシュナは嬉々として招きに応じ、協会員たちにとりまかれて楽しそうに神の話をするのが常であった。

ラーマクリシュナに会ったことよって、ケーシャブの全生活は大きな影響をうけたが、遂に数年後、「新摂理」<sup>ナレタリ</sup>として宣言したところは、ラーマクリシュナが長い間説いていた真理の、部分的な表現に他ならないのであった。

ケーシャブがラーマクリシュナから受けた最も顕著な思想は、すべての宗教が真実であるということである。彼はこの思想に基づき、一八八一年一月、十二人の高弟を伴い、新しい赤旗の演壇に現れた。この旗には「新摂理」<sup>ナレタリ</sup>という語と、ヒンドウの三叉戟と、キリスト教の十字架と、イスラム教の新月とから出来ている異様な標識とが描かれてあり、卓子<sup>テーブル</sup>の上には世界の四大宗教——ヒンドウ教、仏教、キリスト教およびイスラム教の聖典がおいてあった。そして、これらの宗教の中の一つの聖典を学ぶように一人ずつ四人の使徒が任命された。これ以後は、ケーシャブの団体はブラーフマ協会<sup>サマージ</sup>という名よりは、むしろ「新摂理協会」(The Church of the New Dispensation)として知られている。

二人の没後かなり経ってから、ケーシャブの親族や門弟の一部の人たちは、ケーシャブがラーマクリシュナの弟子であったことを強く否定して、ラーマクリシュナをむしろ非難するような口吻<sup>こうふん</sup>を洩らしているが、正式な師弟の関係ではなかったにしても、極めて強い影響があっ

たことは否定できない。しかしそれと同時に、ラーマクリシュナを世に出したのはケーシャブであった、ということも疑うべからざる事実である。

ケーシャブはラーマクリシュナより二年後に生まれ、二年先にこの世を去った。彼の精神は生涯、インド的心情とキリスト教への傾斜の間を大きくゆれ動いて、ついに最後まで安心立命の境地には達し得なかった。しかも大勢の人びとの指導者としては、内心の悩みや疑問を、そのつど表面に出すわけにはいかなのである。ラーマクリシュナはこのような彼の心情を深く理解して、常に慈愛のこもった助言忠告を惜しまなかった。

一八八三年十一月二十八日に、重病のケーシャブをラーマクリシュナは見舞いに行った。そのときの詳しい情景が『不滅の言葉』<sup>コタムリト</sup>に記録されているが、ありきたりの慰めの言葉などは一言も出てこない。ケーシャブの母親が、息子の病気がよくなるように祝福してくれと頼んでも、ラーマクリシュナは拒絶している。

この日、ラーマクリシュナはマヘンドラ・グプタ校長（『不滅の言葉』<sup>コタムリト</sup>の筆録者で、その妻はケーシャブの従妹）ほか四、五人の弟子たちを伴って、ケーシャブの邸におもむいた。奥の病室まで行って見舞うというのに、ケーシャブはあくまで遠慮してその申し出をことわり、ラーマクリシュナは応接間の長椅子の上に坐って、病人が出て来るのを待っている。部屋にはたくさん立派な調度品がおいてある。彼はあたりをパチパチと眺めまわして、酔ったような調子でこう言っ

た。

「前には、こういうものも必要だった。でも今はもう、何の必要がある？」

そして周囲の者たちと少し話しているうちに、深い三昧に入ってしまった。やがてドアからケーシヤブが入ってくる。市民会館その他の大ホールで見事な講演をし、満場の聴衆をうならせたこの美丈夫は、いまや骨と皮にやせおとろえて満足に立っていることもできない。壁につかまりながらヨロヨロと歩き、やつとのことで長椅子の前まできて、そこへへたりこんだ。ケーシヤブはラーマクリシュナをじっと見てから、床にひれ伏して長いこと拜んでいた。ラーマクリシュナは前三昧状態で何かしきりに独り言をいつている。こういう場合は宇宙の大実母と話をしているのである。

ケーシヤブは頭をあげて、精いっぱい声をはりあげて、「私はまいりました。私はここに居ります」と言つて、ラーマクリシュナの手をとり、自分のてのひらでさすりはじめた。神聖な愛に醗酌めいていしたラーマクリシュナの独白は、だんだん声が大きくなってきて周囲の者たちにも聞こえる。一同は魅せられたように口をぽかんと空けたまま、その言葉を聞いている。ことごとく真理の言葉である。

この日の記述の終わりの部分を原典から引用してみよう。

——前略——

聖ラーマクリシユナはケーシヤブにおっしやる——。

「ブラーフマ協会の人たちは、やたらに神の栄光を数えたてるが、ありやどいうワケだろう？ 『オー神よ、あなたは月をお創りになりました。太陽をお創りになりました。夜空の星々をお創りになりました』なんて——。どうしてあんなことをいちいち言う必要があるのかね。たいの人は庭を見てほめるだけだ。庭の持ち主に会いたがるのは何人いるか。庭がすばらしいんじゃない、持ち主がすばらしいんだよ。」

酒を飲んでいい気持ちになったら、わたしは酒屋にどれだけ酒がおいてあるか計算する必要はないんだ。わたしは一びんあればそれで十分なんだからね。

わかるかい？ 人間は自分の富や力を自慢に思っているから、神様も富や力を自慢したいだろうと考える。あの御方の豊かさや威力をほめそやせば、きっとお喜びになるだろうと思うわけだ。サンブー（マリック。彼の信者でカルカッタの富豪）がこう言った。『私の財産を全部、神の蓮華のみ足もとに捧げきって死ぬことができますように、どうぞ私を祝福して下さいませ』と。わたしはこう答えたよ—— 『お前さんにとつては、財産は宝で命から二番目くらいに大事なものだろうよ。それをあの御方に捧げるって？ あの御方にとつちゃ、そんなものは皆、木ぎれ土くれ紙きれ同然なんだよ！』



ヴィシュヌ堂の  
ラーダーとクリシュナ

寺のヴィシュヌ堂に泥棒が入って神像の金や宝石の飾りをごっそり盗んで行った。シエジヨさん（寺の持ち主マートルのこと）とわたしが、神様がどんな具合になったか見にいった。シエジヨさんが、『タヨリない神様だ！ほんとに仕様がな。い。お前さまの体から宝石飾りを全部もっていかれたというのに、どう

することも出来なかったんですか！』と言ったから、わたしはあの人に言っちゃったよ。――『あんな、何てことを言うんだい！神様の宝石飾りだ、神様の金飾りだと何度も言ってるが、あの御方にとってはあんなものはみな土くれと同じなんだよ！富の神ラクシユミーを妻として従えているあの御方に、あんなの僅かばかりの金が盗まれないように番兵しているとしても言うのかい？くだらんことを言いなさんな』

神様は、富や力ではどうにもならない。あの御方は、信仰でどうにかなるんだよ。あの御方は何を求めていらっしやる？金じゃないよ。慕う気持ち。愛。信仰。識別。離欲――

こういうものを求めていらつしやるんだ。

人は自分の想像しているような神を見る。タマス性の信者は、大実母<sup>マ</sup>が羊を食べるものだと  
思っているから、いけにえに羊を捧げる。ラジャス性の信者は、いろんなカレー料理をつくつて、  
米を煮て、お供えする。サツトワ性の信者は仰々<sup>まじまじ</sup>しいやり方で礼拝しない。彼らの祈りは  
他人に気づかれないほどだ。油であげた米にさとうをまぶして二つまみくらいとか、砂糖菓子を  
二つくらい供えれば、それでいいんだよ。たまには神様のためにパエシユ（米、さとう、ミルクで  
つくるプディング）をこしらえることもあるけどね。

それから、この三つの性格<sup>グナ</sup>を超越した信仰者がいる。その人は子供みたいなものだ。神の名を  
となえることが、その人の礼拝なんだよ。ただあの御方の名をとなえるだけだ。

ハッハッハ。——あんたが病気になったのは、それだけの理由<sup>わけ</sup>があるんだよ。体のなかを  
たくさんいろいろな考えや思いが通ったからさ。そういうものが通るときには何ごともない  
ようだが、後になつてから体が傷<sup>いた</sup>んでくる。わたしは何度も見たよ、大きな船がガンジス河を  
通ったとき、別に何ともないようだった。ところが、オー神様！ しばらくしてから土手に  
ドボーン、ドボーンと凄<sup>こわ</sup>い音をたてて波<sup>なみ</sup>がくだけよせてきた。あれじゃあ、きつと土手のどこかが  
壊れてしまったにちがいない！

小屋の中に象が入ると、内部<sup>なか</sup>がめっちゃめっちゃになつてしまう。〴〵思いの象<sup>ぞう</sup>が体の中に入つ

て——。荒らして、こわしてしまふ。

どういふことになるのか、わかるかい？ 火事が起こったときは、まず家の中の品物がボーボー燃える。それから、ワアワア大さわぎになる。智慧の火は、最初、色欲や怒りのような悪いものを焼き滅ぼしてしまふ。それから、我<sup>アハ</sup>の念<sup>おも</sup>いを滅ぼす。それから、いま一つ、大さわぎが起こりはじめる！（註・死ぬ前の肉体の調整）

あんた、これで何もかもお終<sup>しま</sup>いだと思つているのかい！ ちがうよ。病気の痕跡<sup>あと</sup>でも残つてゐるかぎりは、解放されない（註・完全に真理を悟らなければ、何度でも新しく生まれ更わつてくる）。病院の名簿<sup>ドクトル</sup>にあんたの名がのつてゐる間は、出て行くことはできない。病気が完全に治らないうちは、博士<sup>ドクトル</sup>先生は退院<sup>ドクトル</sup>さしてくれないよ。あんた、どうして名前を書かれてしまつたんだい！」（一同笑う）

ケーシャブは、この病院の話を書いて、何度も何度も笑つていた。笑いをこらえきれないような様子だった。やめては、また笑い出すのだった。タクルは再びお話しになる。ケーシャブに向かつて——。（タクル＝神、師、父に対する呼称。ここではラーマクリシュナ）

「フリダイがよく、こんな様子は見たことがない、こんな酷い病氣も見たことがないと言つていたが、昔、わたしは酷い病氣をしたんだよ。恐ろしいような腹下<sup>はらくだ</sup>しだった。二百万もの蟻に頭をかじられてゐるようだった。でも、朝から晩まで神の話をしてゐた。ラム医師<sup>せんせい</sup>が診<sup>み</sup>にきて

くれてね、わたしが坐って、しきりに何かを考えているのを見て、せんせいは言ったつけ——  
『気でも違ったのか。骨と皮ばかりになって、いったい何を考えているんだね!』

あの御方(神)の思し召しだよ。すべては、あなた(神)の思し召し。

すべては あなたの思し召し

あなたは したいようにする

あなたの仕事を あなたがするに

人は ワタシが すると言う

夜露によくあたるようにと、庭師はバラの根元を掘って土をとり除ける。露気を吸うと木がよく育つんだよ。だから、あんたもきつと根をきれいにしてもらっているんだよ、ハハハハハ(ケーシヤブも笑う)。こんどまた会うときは、一段と幹が太くなっているさ!

あんたが病気になる、わたしは居ても立ってもいられないような気分になる。この前の病気のときも、わたしは夜明け前になるといつも泣いたものさ。大実母! ケーシヤブがどうかしたら、わたしは誰と話をしたらいいんだろう、と言ってね。大実母にケーシヤブの病気が治りますようにと一生懸命に祈ったものだ」

ケーシヤブに対するタクルの飾り気のない愛情と心づかいに、一同は感動して聴いている。「でも今度はそれほどでもない、正直なはなし。二、三日は気になったけれどね」

東側のドアから、ケーシヤブの年老いた母親が入ってきた。そのドアの傍でケーシヤブの門弟が聖ラーマクリシュナに向かって声をはりあげて申し上げた。「ご母堂様がタクルにごあいさつをしておられます」

タクルはお笑いになった。門弟がまた申し上げる——「ご母堂様が、ケーシヤブの病気が治るようにと言つておられます」

タクルはおっしゃる——「美しい常樂の大実母に祈りなさい。あの御方が悲しみを除けて下さいますよ」

そして、ケーシヤブに向かって重々しい様子でこうおっしゃった——。

「あんまり奥の部屋にはかりいな方がいいよ。女子供のなかにいると気が沈むだろう。神さまの話をしていれば気分がよくなるよ」

そして今度は子供のように無邪気に笑ってケーシヤブに向かい、——「さア、手をみせてごらん」少年のようにふざけながら手をとって重さを計る格好をされた。——「アラ、あなたの手は軽いいよ！ 偽善者の手は重いそうだが……」（一同笑う）

門弟がドアのところからまた申し上げる。

「ご母堂様が、ケーシヤブが治るように祝福していただきたいと言っておられます」

タクル・聖ラーマクリシュナは、おごそかな声でおっしゃった——。

「わたしに何ができる！ あの御方が祝福して下さるだろうよ。あなたの仕事をあなたがするに、人はワタシがすると言う。」

神様は二度お笑いになる。一度目は、兄弟が土地を分けあうとき。——縄を張って、こっちの方が私のもの、あっちの方がお前のもの！ 神様はこう思ってお笑いになるんだ——全世界はわたしのもの。その小っげな場所に縄をはって、こっちは私のもの、あっちはお前のものなぞと言っている！ あわれな生き物だ！

神様はもう一度お笑いになる。息子の病気がたいそう重い。母親は泣いている。医者が出て母親に言う。『心配しなさんな、お母さん。私がよくしてあげますよ』

神が死なそうとお思いになったら、誰一人、助けることなんかできないのに、医者は知らないんだ」（一同沈黙）

ちょうどそのとき、ケーシャブは咳の発作におそわれた。なかなか止まらない。その苦しそうな音をきいている一同は、自分たちの胸がしめつけられるようだった。長いこと苦しんでやっとおさまった。が、ケーシャブはもうそこに坐っていることができなかった。タクルに向かって、床に手をつけて礼拝した。そしてまた、来たときと同じように壁や家具につかまりながら自分の病室に戻っていった。

——後略——

〔コタムリト「不滅の言葉」一八八三年十一月二十八日より〕

これが二人の、この世における最後の対面の模様である。年が明けて一八八四年、ケーシャブの訃報ふほうをきいたラーマクリシュナは、三日間ベッドから起き上がらなかった。「体の半分がしびれたようになって、動けなかった」のであった。ケーシャブは四十六歳であった。

ここでラーマクリシュナの言葉遣いについて説明しておきたい。ベンガル語は、代名詞と動詞の語尾の変化によって、(一)目上の人や客などに対するていねいな話し方、(二)自分と対等の相手や親しい間柄に対する話し方、(三)目下の者や極めて親しい間柄同士で話す場合、の三種類の言葉遣いがある。ラーマクリシュナはほとんど誰に対しても、(二)と(三)を混交して話す。ただ、初対面の宗教家や修行者には、(一)を用いることが多い。また皮肉を言ったり、ふざけたりする場合も(一)を使う。他人に向かって神の話をするとき、神に対して(一)の言葉遣いをするが、前三昧状態のときなどに自分が神と直接語り合う場合は、(三)である。

これはキリスト教徒や仏教徒には理解し難いかもしれないが、「あの御方ほんとう(神)を真実に知つたら、あの御方は、あの御方ほんとうではなくって、この御方ほんとうになる」と、彼は言っている。即ち、自分が自分に語っている境地と解すべきか。

サンスクリットは、自分で話すことはできないが、学者たちの話は全部理解できた。ヒン

デー語は自由に使えた。元来、ヒンデー語もベンガル語もサンスクリット系の言語であった、同じ語彙が多い。ベンガル人は特別に学ばなくてもヒンデー語を半分位は理解できるであろう。彼は記憶力抜群だったから、カルカッタで会ったり寺院に参詣にくるヒンデー語圏の人たちに接しているうち自然に使えるようになったのであろう。ヴェーダーンタの師、トータプリとはヒンデー語で話したと思われる。晩年になって英国式の教育をうけた知識人が大勢くるようになると、彼の前でもお互い同士で英語の単語をまぜながら話すので、ラーマクリシュナもいくらか憶おぼえた。レクチャ（講演）、ビユーティフル（美しい、すばらしい）フィロソフィ（哲学）、サンキユーなど、時たま怪しげな発音で使ってみせて周囲の者たちを愉快的気分させた。

それから、ラーマクリシュナに対する人びとの言葉遣いであるが、これはほとんど(一)である。ケーシャブやヴィデヤサーガル（当時の有名な教育家、慈善家）のような極めて社会的地位の高い人たちも例外ではない。もともとヒンドゥー教徒は、政府の高官とか大金持ちとか、権力や財力のある人たちをその理由で尊敬するなどということはしないのである。彼らが心から尊敬して足下にひざまずくのは、「真理を悟った人」、神を見た人「であり、次いで、その目的のために真摯な努力をしている出家修行者なのである。洋服を着た立派な紳士が地べたに這いつくばって、その聖なる人の足を自分の額におしただくのである。」

一八七四年から一八八六年の足かけ十二年間が、ラーマクリシュナの説教生活とされている。しかし説教といっても、壇上にのぼって獅子吼したわけでもなく、大学の教室で講義したわけでもない。カーリー寺院の一隅にある自室で、訪ねてきた人びとを相手に雑談をまじえながら実に素晴らしい真理の言葉を語ったのである。またカルカッタに邸を持っている在家の信者たちの応接間で、彼が来ていることを知って集まってきた人たちに、機嫌よく冗談を言いながら話したのであった。

ラーマクリシュナの部屋の扉は、如何なる人に対しても開かれていた。彼は一切の垣根を設けなかった。老人から子供まで、社会の最高位にときめく人びとから最も賤しい身分の人びとまで、あらゆる階層の、あらゆる宗派に属する人びとが彼の話を聴きに來た。彼は教育の有無や身分の高下や年齢の老若によって相手に対する態度を変えようなことは決してしない。ただ彼が問題にしたのは、精神の純粹さと、求道心の強さ、これだけである。そしてその条件を具えたものを、周囲の迷惑や批判などに一切かまわず、その人を徹底的に可愛がった。

遠くの地方から質問をしにやってくる人もある。ラーマクリシュナは朝から晩まであらゆる種類の人びとの訪問を受け、彼らに教え、語り続けた。熱心な人は泊まりこんで行く。彼は休む間もなく、一日に二十時間も話し続けることもあった——神について、信仰について、正しい智識について、そして自分の体験について……。



恍惚状態で踊るラーマクリシュナ



ガンジス河の岸辺にたたずむラーマクリシュナ

(左) カーリー堂の中庭で三昧に入った  
ラーマクリシュナ

信者の描いたラーマクリシュナ

カルカッタは当時インドの首府で、かつ最大の大学都市であり、懐疑主義者、唯物主義者、不可知論者の温床の観があった。ところがこれらの大学人の多くが、この聖者のもとに詣ではじめるようになったのである。あくまでも謙遜なラーマクリシュナは、よくこう言っていた。

「わたしは無学文盲なのに、どうしてこんなに立派な教育をうけた人たちが、わたしの話を聞きながらるんだらう？ 不思議だね。全く神さまの遊戯リイラとしか言いようがない」

ある学者はこう言った。

「あなた様の話はみんな、ヴェータやウパニシャッドやギター（いずれもインドにおける最も権威ある宗教哲学の古典）の中に書いてあることばかりです。けれども、それらの言葉を、あなた様のお口から聞きたくて、私どもはこうしてやってくるのです」